

天声人語

現役時代は単身赴任の寂しさに耐え、ときには飲み過ぎて羽目を外す。引退後は自分の葬儀を気に病む……。東京・両国の江戸東京博物館で特別展「土サムライ」（来月4日まで）を見た、江戸を生きた武士たちの等身大の悩みに触れた▼たとえば江戸詰の久留米藩士を描いた絵巻。心待ちにした帰国が幕府の命令で急に延期され、藩士たちの酒席が荒れる。憤った11人が板戸を倒し、酒瓶を割つて暴れた。本社へもどる辞令が土壇場で取り消されたサラリーマンの心境だろうか▼寿命はいまより短く、五十を過ぎると遺言状を書く武士も多かった。「子どもを遊び人にするな」「自分の葬儀はなるべく質素に、できれば火葬で」。こと細かい指示がしたためられている▼目が留まつたのは歌川広重の遺言状。絵師として名をはせたが、身分は武士で「葬式は武家風に」と明示した。所有品を売つて借金の返済に充てよと記して、こう結ぶ。「死んでゆく 地ごくの沙汰はともかくも あとのしまつがかねしだいなれ」▼担当の小酒井大悟学芸員（42）は「江戸は物価が高く、勤番の武士の暮らしは至つて質素でした」。安い食材を買って自炊に努めた。休日は浅草や向島などの名所をせつせと訪ね、帰国際には送別の宴が連日続いた。そうであつたかに見えて、悩みごと、心配ごとはいまを生きる私たちとほとんど変わらない。サムライたちが職場の同僚であるかのように親しく感じられた。